

令和7年度 椎葉村立尾向小学校 自己評価・学校関係者評価書

4段階評価 【 4：大変よく取り組んでいる 3：よく取り組んでいる 2：少し改善が必要 1：改善を要す

評価項目	評価指標	学校の自己評価結果の考察	今後の方策	自己評価	学校運営協議会委員評価	学校運営協議会委員評価コメント
1 学 力 の 向 上	① 子どもたちにとって学力が身に付く分かりやすい授業を行っている。	算数科を中心に、「複式指導の充実」と「ひなたの学びの実践」に取り組んできた。「複式指導」については、初めて担当する教職員もいる中で、指導の進め方を学び合いながら改善を重ねてきた。また、「ひなたの学び」の実践については、ガイド役の児童が学習をリードし、仲間と協力して学ぶ「ガイド学習」について研究を進めている。学び合いの質を高めるため、話型表を教室に掲示し、どのように話し、聞き合えばよいのかを意識させる指導を行ってきた。一方で、文章問題や、文章で考えを記述して答える問題など、より高い思考力や粘り強さが求められる課題については、さらなる努力が必要であることが分かっている。	「複式指導」や「ひなたの学び」の実践をさらに充実させ、子どもたちが自分の考えを言葉や文章で表現し、粘り強く課題に取り組める力を高めていく。	3.2	3.6	○ 分かりやすく指導していると思う。 ○ 一人一人に丁寧に分かるように授業している。
	② 子どもたちの基礎的な計算力や漢字の習得、音読の力は身に付いてきている。	授業の始めに漢字テストや音読の時間を設けたり、朝の「まなび」の時間に補充的な学習や繰り返し計算問題に取り組ませたりすることで、内容理解を深め、基礎的・基本的な学習の定着を図っている。その成果は、単元テストの結果にも表れている。一方で反復練習は児童の実態に合った効果的な方法であるものの、理解や定着のスピードには個人差が大きく、一斉指導だけでは十分に対応しきれない場面があることが課題として挙げられる。	少人数での補充指導や個別支援の充実、またタブレット学習の内容や活用方法のさらなる工夫などを通して、個に応じた指導をより一層徹底していく。	3.1	3.6	
	③ ICT機器(タブレット等)の活用をすることで意欲や思考力、表現力を高めることができている。	タブレット等のICT機器の活用やリモート授業の取組は、児童の学習意欲や思考力、表現力の向上に一定の成果を上げている。ICT機器の活用が目的化してしまうと、学習の効果が十分に得られない可能性があるため、活用方法の工夫が今後必要である。	学習のねらいを明確にした上でICTを活用し、思考や表現を深める場面を意図的に設定していく。	3.1	3.6	○ タブレットはどの子も使いこなしていると思う。
	④ 子どもたちの学習中の姿勢や準備物などについての指導を通して、学びに向かう態度が育っている。	話を聞く姿勢については、SWPBS(学校全体で取り組む行動支援)の考え方をもとに、「聞き方アンケート」を実施し、1学期から2学期にかけての自分自身の変化を振り返らせることで、望ましい行動を自覚できるようにした。全体として少しずつ身に付いてきている様子が見られる。一方で、学習中の「書くときの姿勢」については、児童によって差があり、体が曲がっていたり、足がついていなかったりする姿が見られることがある。姿勢が継続して保てるよう、場面を逃さない継続的な指導が必要であると捉えている。	学習中の正しい姿勢について、授業の中でその都度声かけを行い、繰り返し指導していく。「聞き方アンケート」は継続して実施し意識付けを図っていく。	2.7	2.9	● 授業中の姿勢が気になる。目が近い、足を椅子の上にあげる、足を組む。 ● 前のめりになっている児童が見受けられる。 ● 授業に集中していない場面が児童(低学年)に見られた。
	⑤ 家庭学習の課題の与え方は適切で、子どもたちは毎日欠かさず取り組んでいる。	各学年で、児童の実態に応じて宿題の量や内容を工夫しており、無理のない量を毎日出すことで家庭学習の習慣は定着してきている。行事など学校生活の状況に合わせて宿題量を調整する工夫も行っている。児童の多くは宿題に毎日取り組む習慣を身に付けているが、課題意識をもち、粘り強く丁寧に取り組む姿勢にはまだ課題がある。タブレットの持ち帰り学習については、児童が意欲的に取り組んでいるものの、その学習がどの程度学力の定着につながっているのかが分かりにくいという課題も挙げられた。	宿題に取り組む目的や学習のねらいを、児童に分かりやすく伝える。タブレットでの学習は、家庭学習の補助として活用し、提出物や確認テストで理解度をチェックするなど、学力定着に結び付ける仕組みを整える。	3.2	3.4	

評価項目	評価指標	学校の自己評価結果の考察	今後の方策	自己評価	学校運営協議会委員評価	学校運営協議会委員評価コメント
2 心の教育の充実	⑥ 子どもたちは進んであいさつをしているか。	校内では教職員の目が届く範囲を中心に、気持ちのよいあいさつができる児童が増えてきている。一方で、「自分から進んであいさつをすること」や、「学校外でのあいさつ」、また児童一人一人の取組の差といった点に課題がある。特に、あいさつが習慣として身につけている児童と、そうでない児童との個人差がはっきりしてきており、学校内ではできていても、地域や校外の場面では十分でない様子も見受けられる。	「あいさつのよさ」や「自分から声をかけることの大切さ」を児童自身が考える機会を設ける。児童が主体的にあいさつを改善し、行動に移せるよう指導していく。	3.2	3.3	● あいさつをしてくれる子としてくれない子が見られる。 ● 学校では出来ているが、外ではできていない子どももいる。
	⑦ 子どもたちの学級の雰囲気は明るく、楽しそうに過ごしている。(学級の中にいじめの兆候は見られない)	児童一人ひとりに寄り添い、いじめの早期発見・早期対応を行う体制を整えてきた。毎月の心のアンケートの実施や、結果報告・全体協議の場の設定、教育相談週間の活用により、児童の状況を職員全員で共有し、小さな変化にも迅速に対応できる仕組みを構築している。また、必要に応じて保護者と情報交換を行い、家庭と連携して子どもたちを見守る体制も整っている。一方で、親しい中であるがゆえに相手が傷つく言葉を使う場面も見られた。	日常生活や学級活動の中で、基本的な言葉遣いや挨拶、感謝の気持ちの表し方を繰り返し指導する。職員間で児童の様子をさらに丁寧に共有し、全員で声かけや支援を行う体制を強化する。	3.2	3.6	○ 仲良く楽しく過ごしている。
	⑧ 焼畑体験学習やみどりの少年団活動は子どもたちの心の教育にもつながっている。	焼畑体験学習を中心に、年間を通して様々な体験学習や活動を計画的に実施してきた。活動の中では、上級生が下級生を指導したり、手本を示したりする姿も多く見られ、少人数であっても互いに支え合いながら主体的に活動に取り組む姿が育ってきている。一方で、みどりの少年団活動は教育課程外の活動であることが多く、授業時数との関係や活動内容・進め方について、今後整理していく必要があることも明らかになった。これらの点については、今年度、学校運営協議会においても、保護者・児童にとって無理なく継続できる取組とするための検討を進めてきた。	焼畑体験活動については地域の方や保護者の協力の在り方についても整理し、無理のない関わり方を検討していく。みどりの少年団活動については、目的や内容、活動方法を整理し、授業時数や児童の負担を考慮し学校運営協議会を中心に検討する。	3.6	3.4	● 少数では限界があるのではない。 ● 職員、児童に負担がかかっていると思う。 ○ 子どもたちにとってすごく大変なことだと思うが頑張っていきたい。 ○ 先生たちも子どもたちもよく取り組んでいると思う。
3 健康・安全の充実	⑨ 体育の授業や朝の体力づくり、体育的行事等による指導により、子どもたちの運動量は確保され、体力向上につながっている。	体育の授業をランニングやサーキットトレーニングから始める共通実践に継続して取り組み、授業の中で十分な運動量を確保してきた。また、業前の「からだ」の時間(15分)を活用し、多様な動きを高める運動を全校で行うことで、児童が楽しみながら体を動かす機会を日常的に設けてきた。さらに、上級生が下級生に集団行動の手本を示す場面も多く見られ、運動面だけでなく、望ましい人間関係づくりにも効果を上げている。運動会、持久走大会、なわとび発表会などの体育的行事の時期には、全校で運動に取り組む時間を意図的に設定し、年間を通じて目標をもって運動に親しむ機会を計画してきた。	体育の授業や「からだ」の時間において、個々の体力や発達段階に応じて取り組める運動内容を工夫し、運動が苦手な児童も達成感を味わえるようにする。体育委員会の活動をさらに充実させ、児童が主体となって運動の楽しさを広げる取組をする。	3.1	3.6	
3 健康・安全の	⑩ 定期健康診断の結果などが速やかに伝達され、保健や食育に関する便り等の情報提供により、むし歯等の治療や改善につながっている。	定期健康診断や各種検診の結果について、終了後できるだけ速やかに家庭へお知らせするよう努めた。迅速な伝達により、早期の受診や治療につながりやすくなったと考えている。学校保健委員会では、救命救急法の研修を行い、安心・安全への意識を高めた。また講師を招いての「大人のための運動」を実施することができた。楽しみながら体を動かす機会を設けることで、少年団や地域活動へとつながる取組に発展させることができた。	健康教育について、児童が主体的に考え、行動できる活動を継続していく。学校保健委員会の取組を充実させ、保護者・地域と連携した健康づくりを推進する。	3.2	3.9	

評価項目	評価指標	学校の自己評価結果の考察	今後の方策	自己評価	学校運営協議会委員評価	学校運営協議会委員評価コメント
充実	⑪ いのちを守る学習、日常指導及び家庭との連携が、子どもたちの安全意識を高め、安全な行動やいのちを大切にしている。	今年度も、地震・火災・不審者対応、交通安全教室、引渡し訓練など、様々な場面を想定した避難訓練や安全指導を計画的に実施することができた。特に、火災対応の避難訓練では、消防団第10部の協力のもと、講話に加えて水消火器を用いた消火体験を行い、体験的な学びを通して、子どもたちが自分の命を守る行動を具体的に考える機会とすることができた。	引渡し訓練や火災避難訓練などを通して、家庭との連携をさらに深め、共通理解のもとで子どもたちの安全を守っていく。	3.4	3.9	
4 家庭・地域との連携	⑫ 学校は、地域の特性を生かし、PTA と連携して、子どもたちのための教育活動を推進している。	PTA や地域の皆様の強力なご支援をいただき、尾向地区ならではの学習や体験活動を実現することができた。地域行事や祭り、各種体験活動においては、教職員も PTA や地域の方々と協力しながら取り組むことで、児童が地域に親しみ、故郷を愛する心や、自分たちを支えてくださる方々への感謝の気持ちを育むことができたと考えている。学校運営協議会においても、学校・保護者・地域が一体となった教育活動の在り方について協議を重ねている。	今後も学校運営協議会を中心に、行事や活動の目的を改めて明確にし、「子どもたちにとって何が大切か」という視点で精選を行っていく。	3.5	3.7	● 行事が多すぎではないか。地区ならではの活動、どうにかできないかと思う。 ○ 先生方が地域の行事等に積極的に参加してくださっている。 ○ PTAと学校との連携がよく取れ、子どもの教育に力を入れていると思う。 ○ 学校だよりは孫の様子が分かるのでいい。
	⑬ 学校や学級は、ホームページや学校便り、学級通信等を通して、必要な情報を家庭に発信している。	学校だよりや学級通信を定期的に発行し、学校や学級の様子を保護者の皆様にお伝えすることができた。また、学校ホームページを通して、学校の取組や児童の成長の様子を積極的に発信してきた。その結果、学校ホームページの更新頻度は以前より高まり、閲覧者数も増加している。1 月末時点での閲覧者数は約 210 万人を超え、1 年間で約 40 万アクセスがあった。	これまでの取組を継続するとともに、学校だよりや学級通信、ホームページの内容を整理し、重要な情報が分かりやすく伝わるよう工夫していく。	3.6	3.9	

本年度の成果と次年度の方向性

- 本年度の学校評価では、昨年度を上回る全体的に高い評価をいただくことができた。地域や保護者と学校が同じ方向性を共有しながら指導にあたることができている点は、大きな成果であると捉えている。一方で、個別に見ると低い評価を付けられている項目やご意見もあり、真摯に受け止める必要がある。本校は小規模校であるという強みを生かし、一人一人の実態に応じたきめ細かな対応を進め、改善に向けた具体的な手立てを講じていく。
- 全体として評価が低かった項目は、「学習中の姿勢や準備物などについて」であった。学校運営協議会、保護者、教職員のいずれからも課題として挙げられており、学校として重点的に取り組むべき事項であると認識している。特に「話を聞く姿勢」については、学習の基盤となるものであることから、指導の徹底を図る。
 - ・ 本年度より導入している SWPBS(学校全体で取り組む行動支援)の考え方を基盤に、「聞き方アンケート」等を実施し、学期ごとの振り返りを通して自らの変化を自覚させる取組を行ってきた。その結果、望ましい聞き方は少しずつ身に付きつつあるので、継続して振り返る機会を設定する。
 - ・ 「書くときの姿勢」については児童間で差が見られ、体が曲がる、足が床につかないなど、姿勢が安定しない様子も見受けられる。姿勢は学習の基礎であり、学力向上にもつながる重要な要素であることから、場面を逃さない継続的な指導を行う。
 - ・ さらに強化期間を設定し、全校で集中的に取り組むことを検討していく。
- 「あいさつ」については、校内においては教職員の目が届く範囲を中心に、気持ちのよいあいさつができる児童が増えてきている。一方で、「自分から進んであいさつをすること」や「学校外でのあいさつ」については課題が見られる。あいさつが習慣として身に付いている児童とそうでない児童の差も明確になってきており、校内ではできていても地域や校外では十分に実践できていない場合もある。
 - ・ 今後は、校外学習や道徳の授業などを活用し、「あいさつ」を実際に体験できる場を意図的に設定し、「自分から声をかけることの大切さ」について児童自身が考える機会を設ける。児童が主体的にあいさつの在り方を見直し、行動に移すことができるよう、継続的な指導と支援を行っていく。
- 次年度は、これらの課題を明確にした上で、学校・家庭・地域が一体となり、学習の基盤となる基本的な生活習慣や態度の育成をより一層充実させていく。小規模校の強みを生かしながら、児童一人一人の成長を丁寧を支える学校づくりを推進していく。

各項目削除文（メモ）

①特に複式指導の授業改善を主題とした校内研修に継続して取り組んできました。今年度の研究の柱は、

①さらに、対話力向上を目的として、SWPBSをもとにした「聞き方アンケート」を実施し、自分の成長を振り返る機会を設けました。その結果、授業に意欲的に取り組む姿や、友だちと学び合いながら考えを深めようとする姿が見られるようになり、学習への取組や学びに向かう態度に良い変化が見られています。

①これは、学び合いの質や深まり方に個人差があることや、学年に応じた対話の力を段階的に身に付けさせる取組が、十分に整理されていなかったことが一因と考えられます。

①学び合う姿をより明確にするため、学年間の系統性を意識した到達目標を設定し、指導の充実を図ります。具体的には、
・低学年：友だちの話を最後まで聞き、自分の考えを話す
・中学年：考えを比べながら話す
・高学年：考えを広げ、深めながら話すといった段階的な目標をもとに、対話の力を育成していきます。

また、

①今後も、分かりやすく、子どもたち一人一人の学力向上につながる授業づくりに、学校全体で取り組んでまいります。

②子どもたちの基礎的な計算力や漢字の習得、音読の力については、全体として着実に身に付いてきていることが分かりました。

②タブレットを活用した学習を取り入れ、児童一人一人の理解度に応じた練習や復習ができるよう工夫しています。また、毎日の音読や計算練習を継続することで、計算の仕方や言葉のリズム、表現力が身に付いてきている様子も見られます。

③年間を通じて、1・2年と3・4年は道徳、5・6年は道徳と社会において不土野小とリモート授業を行ってきた。

③特にリモート授業では、離れた場所においても「一緒に学ぶこと」が特別なことではなく、日常的な学習の形として受け入れられるようになってきています。このことは、ICT機器の操作能力だけでなく、他校の友達と考えを交流しながら学習を進めるコミュニケーション力の向上にもつながっています

③タブレット学習の成果を授業やテスト、振り返り活動と結び付け、学力の定着を確認すること。

④また、身の回りの整理整頓や休み時間の過ごし方についても、学びに向かう態度と深く関わっていますが、常に意識して行動できない児童もあり、今後さらに働きかけが必要な状況です。

④理整頓や休み時間の過ごし方についても、学習への構えと関連付けながら指導を行います。

⑤担任間で情報を共有し、学年間で大きな差がないよう配慮しています。

⑤取り組みの姿勢や工夫した点を褒めるなど、モチベーション向上に努めます。

⑤放課後子ども教室で終わらせる場合も、学習内容を家庭で振り返る時間を設けるよう工夫します。

⑤家庭学習においても、学習内容や取組状況を教師が把握し、適切な助言や評価を行うことなどに取り組み、ICT活用の効果をより高めています。

⑤放課後子ども教室で宿題を終わらせることが多く、家庭で自分の力で取り組む時間が十分でない場合があります。

⑤宿題提出時に、内容の確認や振り返りを行い、丁寧に取り組んでいるかを担任がチェックします。

「ここを頑張ったね」「もっと工夫できるよ」といった具体的な指導で、粘り強く取り組む姿勢を促します。

⑥中学年以上の児童を中心に、朝のボランティア活動や集会の準備・片付けなどに積極的に取り組んでいます。低学年の児童も徐々に朝のボランティアに参加するようになり、児童全体として「誰かのために行動する」姿勢が育ってきています。

⑥今後も、児童一人ひとりが自ら考えて行動し、「誰かのためにできること」を喜びとして感じられるよう、学校全体で支援してまいります。

⑥活動を通して、児童たちは「貢献する喜び」を少しずつ実感できるようになっています。

2活動に参加する児童は増えているものの、全体に目を向けて必要感をもって行動する児童もさらに増やす必要があります。自分の行動が他者や学校全体にどのように貢献しているかを意識できるように、日々の活動への具体的なフィードバックや承認が十分でない場合があります。

⑥朝のボランティアや集会準備などの活動で、児童の行動を具体的に褒める、感謝の言葉を伝える工夫を行います。

教師がコメントや評価を伝えることで、行動の価値を実感させます。

⑦昼休みには学年を超えて楽しく遊ぶ児童の姿が多く見られ、学級や学校での活動に生き生きと取り組む様子が確認されました。学級の枠を超えた学習活動を行うことで、縦の関係づくりや友だちとの関係形成も促進されています。

⑦この点については、学級の雰囲気明るいこととは別に、日常生活や集団行動の中で繰り返し指導していく必要があります。

⑦遣いや「ありがとう」「ごめんなさい」といった基本的なマナーが十分に身につけていない児童も少なくありません。

⑦学級を超えた交流活動やグループ活動を通して、友だちとの関係性を深め、思いやりの心や協力する力を育てます。

「ありがとう」「ごめんなさい」を自然に言える場面づくりや、児童同士で褒め合う活動を取り入れます。

学級内でのポジティブ行動が見える化し、良い行動を意識できるような工夫を進めます。

⑧地域の方々に支えていただきながら行うこれらの豊かな体験は、子どもたちが周囲の人への感謝の気持ちをもったり、地域の伝統を守り受け継いでいくことの大切さを理解したりすることにつながっています。

訂正、追記、修正

⑧活動の意義は大きいものの、すべての児童が主体的に関われる形にすることや、とが課題であると捉えています。

⑧焼畑体験学習については、教育課程との関連を意識し、学習としてのねらいを明確にした上で継続します。

その結果、年間を通して病欠欠席の児童も少なく、体力の向上や健康な生活習慣の定着が図られていると考えています。

⑧また、体験学習を重ねるごとに、地域や母校への誇り、ふるさとへの理解を深める児童の姿が見られるようになってきました。

⑨昼休みには、全校で遊んだり、教員も一緒に体を動かしたりすることで外遊びを奨励し、学校全体で体力向上に資する取組を進めてきました。

⑨一方で、運動が得意な児童と苦手意識をもつ児童との間に意欲や体力差が見られる場面もあります。また、学校での運動量を家庭生活や休日の過ごし方につなげることが、今後の課題であると捉えています。

⑨この「からだ」の時間は、児童が毎回楽しみにして意欲的に取り組んでおり、運動量の確保と体力向上につながっています。

⑨体育的行事に向けた取組では、記録や結果だけでなく、努力の過程や継続することの大切さを重視した指導を行います。

昼休みや業間の時間を活用し、引き続き外遊びを奨励します。

⑨保健だよりのポイントや家庭で話し合っほしい内容を補足的に発信します。

⑨また、体育委員会を中心に全員遊びを企画・実施するなど、児童の自主的な活動も広がっています。

⑩歯みがき指導については、保健・給食委員会を中心に、児童が主体的に関われるよう活動内容を工夫し、正しい歯みがきの大切さを自分事として捉えられるようにしました。その結果、今年度のむし歯治療率は〇%を達成することができました。また、保健だよりに通して、健康や食生活、感染症予防などに関する情報発信を継続して行い、季節や感染状況に応じた内容の工夫にも努めてきました。さらに、

⑩こうした実践的な訓練や、日常生活の中での継続的な声かけ・指導により、安全に対する意識が高まり、いのちを大切にしようとする心情の育成につながっていると捉えています。

⑩避難訓練を「やりっぱなし」にせず、事後の振り返りを充実させ、なぜその行動が必要なのかを子ども自身が考える指導を行います。

⑩児童・保護者・地域のいずれにとっても負担が少なく、効果的な行事や活動の在り方について検討を進めてきました。

⑩一方で、世帯数や児童数、職員数の変化により、従来と同じ形での行事運営や活動継続が難しくなっている面もあります。行事や取組によっては、保護者や地域、児童双方に負担感が生じている可能性もあり、今後は無理のない形での継続が課題であると捉えています。

⑩児童数の減少や長子家庭の減少といった地域的な課題がある中においても、

⑩世帯数や児童数、職員数など、学校の実情に応じて、行事内容や運営方法の見直しや工夫を行います。

PTA や地域の方々と丁寧に話し合いながら、「できることを、できる範囲で」進めていきます。

⑩さらに、マチコミメールの活用を進めることで、連絡事項や緊急時の情報を迅速に伝える体制が整い、その利便性や即時性について、保護者の皆様に理解を深めていただくことができました。

⑩マチコミメールについては、緊急連絡や特に重要な内容に絞って配信するなど、情報の整理を行います。

写真や短い文章を効果的に活用し、児童の様子がより伝わる情報発信を心がけます。